日本農業新聞
(7)　JA　2020年(令和2年)8月8日(土曜日)

協同の系譜 ⑩

第1部　川崎 平右衛門

平右衛門と尊徳

無私の心で力合わす

農的社会デザイン研究所代表　蔦谷 栄一

連載の締めくくりに川崎平右衛門と二宮尊徳との若干の対比を試みておきたい。

日本の協同の源流として二宮尊徳（1787～1856年）、そして大原幽学（1797～1858年）が取り上げられるが、両者ともに活躍したのは幕末となる。これに対して川崎平右衛門（1694～1767年）は江戸時代の半ば、約100年前に活躍している。尊徳について紹介するまでもないが、その教えは今市田植歌の歌詞「至誠、勤労、分度に推譲、報徳教えは今市の宝」に凝縮される。600余の農村や小田原藩をはじめとする諸藩の再建にあたった。

平右衛門、尊徳ともに私を離れて公に身を捧げ、現場の人たちの力を引き出しながら地域興しに全力を傾けた。また『民間省要』の著者でもある田中丘隅（きゅうぐ）に多大の影響を受けたことも共通している。しかしながら、平右衛門が土木や治水などのインフラ整備に注力して生産基盤を整え、生業を可能にさせていったのに対し、尊徳は節約をベースに藩や村の財政・経営の立て直しに重点を置いた。これは、江戸時代も後半ほど市場経済が浸透し、プロト工業化（工業化以前の農村工業）が進展したという、時代の変化がなさしめているように理解される。

一方、尊徳の存在は当時からよく知られていたのに対し、平右衛門については知る人の地域が限られていた。この大きな違いは、尊徳はたくさんの門人を抱えていたためで、富田高慶が『報徳記』、福住正兄が『二宮翁夜話』の記録を残し、安居院（あぐい）庄七が報徳社の活動を展開するなどした。

顕彰会・研究会設立総会後、郷土の森博物館にある平右衛門像の前で（東京都府中市で）

門人なく乏しい記録

その尊徳は小田原藩に仕え、その後幕府に登用され御普請役格に取り立てられたものの、老中・水野忠邦の失脚もあって幕府で活躍できる場は与えられずに終わった。これに対し平右衛門は武蔵野新田開発、木曽三川の治水で実績を上げ、代官にまで昇進。確固たる地位に就いた平右衛門は、逆に幕府の歯車の一つとして専ら活動したが故に、門人を持つこともなく、その記録などが残されることは乏しかった。

このあまり知られざる平右衛門との出会いは本連載の第1回で触れたように、現代座公演「武蔵野の歌が聞こえる」による。協同組合関係者も含めてこれを見て心打たれ、もっと平右衛門を世の多くの人たちに知ってもらいたい、平右衛門を通じて協同の心を学んでいきたいという有志が集まり、2017年に川崎平右衛門顕彰会・研究会（会長・山田俊男参議院議員）を立ち上げ、筆者は事務局長を務める。研究会（会長・大石学東京学芸大学名誉教授）を毎年開いて、平右衛門について学ぶとともに、協同活動の地域での実践を目指した研さんの場を設け、今年は11月20日に東京・国分寺市で研究会開催を予定している。

協同労働法に期待も

最後に、今、平右衛門が生きていたら何をするか。大きく発展した協同組合組織に驚く一方で、協同組合と組合員との関係が顧客・サービス化していることを嘆くのではないか。組合員一人一人が主役の「小さな協同」を進めていくために、協同労働法の成立と発展に期待するのではないか。

（「第1部」おわり）